The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国哲学史研究ノート〔二〕
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1985, 2, p. 51-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61173
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国哲学史研究ノート〔二〕

加地伸行

本誌先号において、研究者の学術的作業として、報告作成と論文作成との二方面があること、そしてその関係について述べた。さらにまた、本誌は、主として報告を登載してゆく編輯方針であることも述べた。

ところで、私が「中国哲学史研究ノート」と題して連載を書き始めたのには、もちろん理由がある。その最大のものは、学界に共通のルールを提供したいという気持である。これには、個人的経験がからんでいる。

私が研究者として出発した二十代後半のころ、論考（論文と報告との両者を含む意味）の書きかたについて、だれも教えてくれなかった。もちろん、これは私の場合だけではなくて、だれしもみな同じであった。

結局、手さぐりで、すぐれた研究者のすぐれた論考を読み、自分で体得してゆくより他に方法がなかった。しかし、どういうふうにしたならば、そのようなすぐれた論考が書けるのか、経験の浅い当時の私にはなかなか呑みこめなかった。そのため、書きかたが分らず、途中でやめて流産に終った論考も少なくなかった。

我国では、研究は各自が行うものという形がふつうであり、共通の了解という意識が稀薄である。いわば、職人芸的である。仮に教えを乞うたときでも、教えていただいたことの大半は精神論である。「しっかりがんばりたまえ」というふうに、激励はしていただけるのだが、ではどういうふうに、ということになると、なんだか聞きづらく、うやむやの内に終るということを、私は何度か経験した。

やむをえず、自分が個人的に苦労して知り得たものを書きとめ、それを手引にして、なんとか書きかたの約束ごとめいたものを、大ざっぱながら自分流に作ることができたのは、三十歳

を越えたころであろうか。そのころから、急に筆が進むようになった。

もちろん、その六、七年間の苦労は、むだではなかったとは思う。体得したわけであるから、実体験の強みがある。しかし、新進研究者が同じ苦労をすることに、果して意味があるのだろうかと最近思うようになってきたのである。

というのは、新進研究者の発表を聞いたり、論考を読んだりするとき、自分ならここはこうする、こういうふうに組み立てればもっと生きる、と思うようになってきたからである。

もちろん、自分を省みて、研究者として不十分であることを思い、今後の研究への道を深むべく、反省は怠っていない。もとより私は生涯一学徒にすぎない。

ただ、研究生活が少し早かった一人の先輩として、自分のこれまでの経験の一端を語り、後輩研究者の論考作成上の一助となることを願って、このノートを書き始めたのである。本誌の刊行もそれと関わりがあるが、いずれそのことも併せて述べることになるだろう。

× × ×

『論文の書きかた』――このように題した本が、世の中にたくさんある。私も数冊持っていて、読んだことがある。しかし、そのほとんどが役に立たなかった。

その理由は、その種の本が指す「論文」の概念が、研究上においてわれわれが求めるそれと異なっているからである。

どういう点かと言えば、その種の本が言う「論文」の中味は、すでに分っていること、既知のことを集めて再構成することがほとんどである。いわゆる「小学生の研究発表」である。調べたお勉強の満艦飾展示である。

しかし、研究上の「論文」とは、未知のことを論ずることを目的とする。研究とは、未知の世界への挑戦なのであって、既知の世界の同語反復ではない。ここのところが決定的に異なっている。

もちろん、未知の部分の解決のためには、既知のものを動員せねばならない。それは当然のことである。しかし、既知のことの寄せ集めと、既知を使って未知を探索することとは、異なった行為である。前者が演繹的・模倣的であるのに対して、後者は帰納的・創造的であるからである。

この相違を、研究者自身が、案外、心得えていないのに驚くことがある。未知の世界の探索に関心がない者、探索の心細さを恐れて勇気のない者は、研究者として不適である。

さて、世の『論文の書きかた』にもどる。

この種の本の性格が上述のごとくであるところから、その中味は、原稿用紙の使いかただとか、句読点の打ちかただとか、枝葉末節のことに力を入れている。極端に言えば、そんなことはどうでもいいことなのである。

さらに、『論文の書きかた』は、主題、テーマの決定という最も大切な点について、いとも簡単に説明する。「主題が決っ

たならば……」と。

私は、こういう発想にやりきれない思いである。実は、主題が決まるということは、その論考の半分ができあがったことに近いと考えるからである。

なぜなら、主題とはつまりは問題の設定のことである。問題の設定をすることができるためには、問題の探索が必要である。問題の探索とは、疑問を起すことである。疑問を起すというのは、みなが常識として疑わないところに疑いを起すことである。つまりは、一見、安定したことがらに対して疑いを抱くという、最も基本的な〈哲学する〉精神が根本になくてはならないということなのである。

このような精神のない者が、どうして創造的行為をなしえよう。「中国哲学史」と称する以上、根本に「哲」がなくては、「哲学」がなくては、骨太な論文は生れない。まさに「学びて思わざれば、即ち罔し」である。

しかし、一方、「思うて学ばざれば、即ち殆し」もまた真理である。そこで、ここでは、「思う」ことは自明のこととしてしばらく論じないでおく。もっぱら、自分の経験を語る具体論として、「学ぶ」点について論じたいと思っている。

さて、主題の決定――問題の設定に至るためには、上述の「思う」以外、手続きとして「学ぶ」面がある。手続という、一定のルールがあると考える方が、具体的である。

私は、職業的研究者の場合は、個人的趣味ではなくて、その主題を選んだ必然性を明らかにし、研究に社会性を与えるべきであると考える。これに反して、職業的研究者でない場合は、個人的趣味の領域に遊ぶことが許されよう。

具体的に言えば、仮に、ここにAという、個人的趣味で中国哲学史をいじくっている人がいるとしよう。Aが個人的趣味で、何をどのようにいじくっていようとそれは自由である。そこで、或る日、突然にテーマを思いついて一篇の文章を草したとしよう。そのテーマとは、「孔子と老子とは、どちらが偉いか」である。

こういうテーマは、ほとんど無意味である。「偉い」というのは、個人的信念あるいは信仰の度合いによって決るものであり、真偽の追求は不可能に近い。そこには、社会性がない。また、仮にその結論を見たところで、その結論によって、中国哲学史研究上、なんの影響も出ない。というのは、声を大にする信念の確認では、客観的説得力がないからである。

しかし、ただ笑ってはいけない。「孔子と老子とはどちらが偉いか」というテーマ、今日では無意味なものの、過去の或る時期においては、意味があったのである。すなわち、かつて儒教が社会的に現実に影響力を持っていた時代、儒教は〈実学〉であった。儒教的教養を身につけること自身が実利を伴い、就職の〈技術〉であった実学の時代では、孔子・老子比較論は有効なテーマであった。というのは、「孔子と老子とはどちらが偉いか」というテーマをあえて設定し、なにがなんでも老子を

叩いて、孔子を偉いとせねばならなかったからである。なぜなら、老子が孔子よりも偉いとなると、儒教の実学としての基盤が崩れることになる。すると、儒教に頼って生きている自分の生活も崩れることになる。生活がかかっている。となれば、なにがなんでも孔子を老子よりも偉いとしなければならなかった。すなわち、儒教が実学の時代では、Aのテーマも、生き生きとしたものであったのである。

しかし、現代、儒教は実学ではない。就職に有利な技術ではない。虚学となっている。だから、「孔子と老子とどちらが偉いか」論争において、どちらが勝とうと世間の大勢にまったく影響はない。虚学としての儒教の研究においては、もちろん、まったく影響がない。

このように、主題を決定するときは、学界という、職業的研究者の共通の社会において、社会性を認められる範囲においてでなければ、個人的趣味に陥る危険性がある。

もちろん、流行のテーマに媚びる必要はないし、またあるいは、気宇壮大に百年後の博雅に期すという立場もあるだろう。学界ごとき狭い世界の現在の学者先生などは問題にしない、という考えもあるだろう。そこに研究の自由があることは言うまでもない。

しかし、われわれはおたがい正直なところ凡庸な人間である。その主題の決定については、凡庸なわれわれがたがいに共通に了解のできるというあたりから始めるべきであると考える。

となれば、個人的趣味や思いつきに拠って研究主題を決めるべきではあるまい。

では、どういうふうにして主題を決めるのか、ということになる。

× × ×

主題を決定する正統的手続としては、まず研究史の報告を準備すべきである。

もちろん、その前に、大きな方向づけが必要である。哲学研究と言う場合、存在論、認識論、論理学、倫理学、宗教哲学、自然哲学等々といった大きな枠組の別、あるいは、政治思想、歴史思想、国家思想等々といった具体的分野の別、あるいは、先秦、漢代、六朝等々といった時代の別、という点である。

これは、個人の関心の問題であるから、ここで論ずる必要はない。その決定のプロセスは、各人の問題である。

そこで、仮に個人的関心から「先秦時代の論理学」という大きな方向づけを行なったとしよう。これは研究分野の決定である。

しかし、研究分野は、漠然としており、抽象的である。そこでそれを具体化するために、具体的主題を決めなければならない。

その際、当然のこととして自分の志す研究分野の或る領域について、過去の研究をふりかえってみなくてはならない。これまで、どのように、どういうふうに、研究がなされてきたのか、

ということの反省である。すなわち研究史の報告作成が必要である。

さて、「研究史」というふうに、「史」と言う以上、本当は、研究の反省に史的考察を加えるべきであるが、最初はそこまでできなくても全体を知るだけでもいいと思う。まずこれまでの研究の内容を知り、批判的に吸収するという作業から始めるべきである。

さて、研究史を批判的に反省すると、どういうことが、どこまで、これまでになされてきており、どういうことが、まだなされていないか、ということが分かる。であるならば、自分は、まだそのなされていない方面の検討を試みるということを導き出すことができよう。

これは、自分の研究を研究史に自ら位置づけることとなる。それは主題の社会的認知ということである。或る日突然の個人的趣味による思いつきではないということである。

こうした研究史作成の作業によって、研究上の展望を得ることができる。聞けば、いわゆる〈偉い〉学者は、他人の論考は読まないそうであるが、それは〈偉い〉からそのようにできるのであって、凡庸な一般研究者は、まねるべきでない。凡人らしく、着実な方法を取るべきであろう。

さて、この研究史を作ってゆく際、当然に必要なことは、その主題に関する過去の論考にどのようなものがあったのかということの検索である。すなわち、目録の作成である。つまり、研究史と目録と、この両者の作成は深い関係にある。ともに報告として重要な作業である。この問題を含めて、次回にさらに論じたいと思う。